

ADL場面における半側空間無視が改善した慢性期頭部外傷症例

○大鹿 遼¹、阿部 浩明¹、長嶺 義秀²、藤原 悟³

¹東北療護センター リハビリテーション科、²東北療護センター 診療部、³広南病院 脳神経外科

【はじめに】半側空間無視(以下、USN)は日常生活活動(以下、ADL)の阻害因子である。種々のUSNに対するアプローチが報告されているが、その効果は課題以外へ汎化しにくく、ADL向上に至らない場合が多い。今回、頭部外傷後に左USNを呈し行動性無視検査(以下、BIT)では改善がみられないにもかかわらず、ADL場面におけるUSNに関連した現象に著明な改善を認めた症例について報告する。

【症例紹介】43歳、男性。交通事故にて受傷。受傷6ヶ月後に当センター入院となる。理学療法初回評価では左片麻痺を呈し、Brunnstrom stageは上肢III・手指III・下肢IV。BITは通常検査117/146点。ADL場面では、「車椅子ベッド間の移乗時に左ブレーキを忘れる」「歩行中に左側の壁へ衝突する」等が観察され、監視～軽介助が必要であった。理学療法では左側への注意を促しながら、病棟内でのADL訓練を繰り返し実施した。なお、同様の活動は理学療法場面以外においても病棟看護師により左側への注意を促しつつ実施された。現在、身体機能面での変化はなく、BITも通常検査117/146点と変化はみられないが、前述のUSNに関連した現象の出現頻度は著明に減少した。

【考察】今回の結果は、USN自体には改善がなく、その代償として左側へ注意を向ける過程を学習した効果と思われた。同一環境下でのADL動作を実践するには、リハビリテーションスタッフのみならず、病棟内ADLにおける看護師の関わりも重要であったと思われ、チームアプローチの重要性が再認識された。